

### カザフスタン国際柔道大会

4月5日 カザフスタン

90 kg級

優勝 矢寄雄大(明 大)

### アジア柔道選手権大会

5月26～28日 大阪市中央体育館

100 kg級

優勝 井上智和(新日鉄)

90 kg級

優勝 矢寄雄大(明 大)

〔決勝戦〕

矢寄雄大○ 朽木倒 アンダーソン

(日本・明大) (ブラジル)

### 全日本ジュニア体別別選手権大会

6月3日 講道館

73 kg級

二位 早川憲章(明 大)

### 世界学生柔道選手権大会

12月14・17日 スペイン・マラガ市

100 kg超級

優勝 棟田康幸(明 大)

100 kg超級

優勝 棟田康幸(明 大)

### 全日本柔道選手権大会

4月29日 日本武道館

〔決勝戦〕

棟田康幸○ 優勢勝 ミハイリン

(日本・明大) (ロシア)

### 全日本選手権大会出場者

棟田康幸(学生ベスト8)、井上智和、

吉田秀彦

互にガップリとなる。三分、ミハイリン棟田の奥襟を取りにくる出ばなを棟田袖釣込腰でかつぐと横倒しとなり「有効」。ラスト二十秒頭の下った棟田に指導がくるが結局棟田の勝ち。

今大会好調の矢寄全試合一本勝ちで優勝した。決勝は矢寄の攻勢に防戦一方のアンダーソンに指導、注意が与えられる。矢寄なおも押し込んで攻め小内刈の流れから朽木倒しに変化すれば見事に決まる。

### シドニー・オリンピック

9月10日 オーストラリア

柔道競技は九月十六日から二十二日までシドニーエキジビジョンホールで行われた。明柔選手吉田秀彦(九〇kg級新日鉄)は三回戦、女子七八kg級阿武教子(明治大学)は二回戦で共に敗退する残念な結果に終わった。

## 第50回全日本学生柔道優勝大会

6月23・24日 日本武道館

### 明治優勝十六回目 五十回大会の節目を飾る

第五十回を迎えた全日本学生柔道優勝大会が六月二十三日、二十四日の両日、日本武道館で行われ明治大学が国士舘大学を下して優勝、最多優勝回数を十六に更新した。

この大会明治は優勝候補の一角東海大を下して上ってきた日体大、また関西の常勝校天理大を危げなく下して決勝に進出、同じく快調に勝ち上ってきた国士舘大と対した。

戦前の大方の予想は国士舘やや有利とのことだったが、明治は棟田、矢嵩の活躍と大将増村のねばりで三年ぶり十六回目の優勝旗を駿河台にもたらした。

#### 〔決勝戦〕

明治大学 2-1 国士舘大学

矢嵩雄大○ 大内刈 高谷 渡  
保立 勝 引分 澤 享  
古賀崇裕 小外刈 ○鈴木桂治



3年ぶり16回目の優勝をとげた明治大学チーム

棟田康幸○ 体落 深沢大輔  
泉 浩 優勢勝 ⊕高井洋平  
落合幸治 引分 岩上真琴  
増村一人 引分 市之渡秀一

優勝は大将戦に持ち込まれた。体重九〇kg

の増村に対し市之渡は一三五kgの巨漢、しかもここまで全試合に一本勝ちのポイントゲッター。しかし、これを分ければ内容差で明治が勝つ。両者指導後の二分、増村の背負が「かけ逃げ」と見られて警告となる。

ベンチの吉田監督から「足を使え！」の声がかかる。リードした市之渡は守りに入って攻勢がとまる。逆に増村は指示通り小内、大内、払釣込足と足を使つての攻撃に出た。残り時間四十五秒市之渡に警告。増村残り時間を乗り切つて引分、明治の優勝が決まった。

### ドイツ国際柔道大会

7月7日 ミュンヘン

90 kg級

二位 矢嵩雄大(明大)

### 全日本ジュニア体重別選手権大会

9月9日 講道館

66 kg級

優勝 寺居高志(明大)

### 全日本学生柔道体重別選手権大会

10月6・7日 日本武道館

66 kg級

優勝 寺居高志(明大)

90 kg級

優勝 泉 浩(明大)

100 kg級

優勝 飯銅崇晋(明大)

73 kg級

三位 早川憲幸(明大)

### 講道館杯全日本体重別選手権大会

11月23・24日 講道館

100 kg超級

優勝 棟田康幸(明大)

90 kg級

二位 矢野雄大(明大)

### 全日本柔道選手権大会

4月29日 日本武道館

全日本選手権大会出場者

棟田康幸(学生ベスト8)、矢野雄大(学生ベスト8)

### 世界女子柔道選手権大会

7月26～29日 ドイツ・ミュンヘン

### 阿武教子三連覇

〔二回戦〕

78 kg級

阿武教子○ 合せ技

(日本・警視庁)

モ ニ ー

(コートボデー)

〔三回戦〕

阿武教子○ 優勢勝

(日本・警視庁)

ズウィールス

(オランダ)

〔準決勝戦〕

阿武教子○ 注意

(日本・警視庁)

イ・ソンヨン

(韓国)

〔決勝戦〕

阿武教子○ 注意 ラボルテ

(日本・警視庁)

(キューバ)

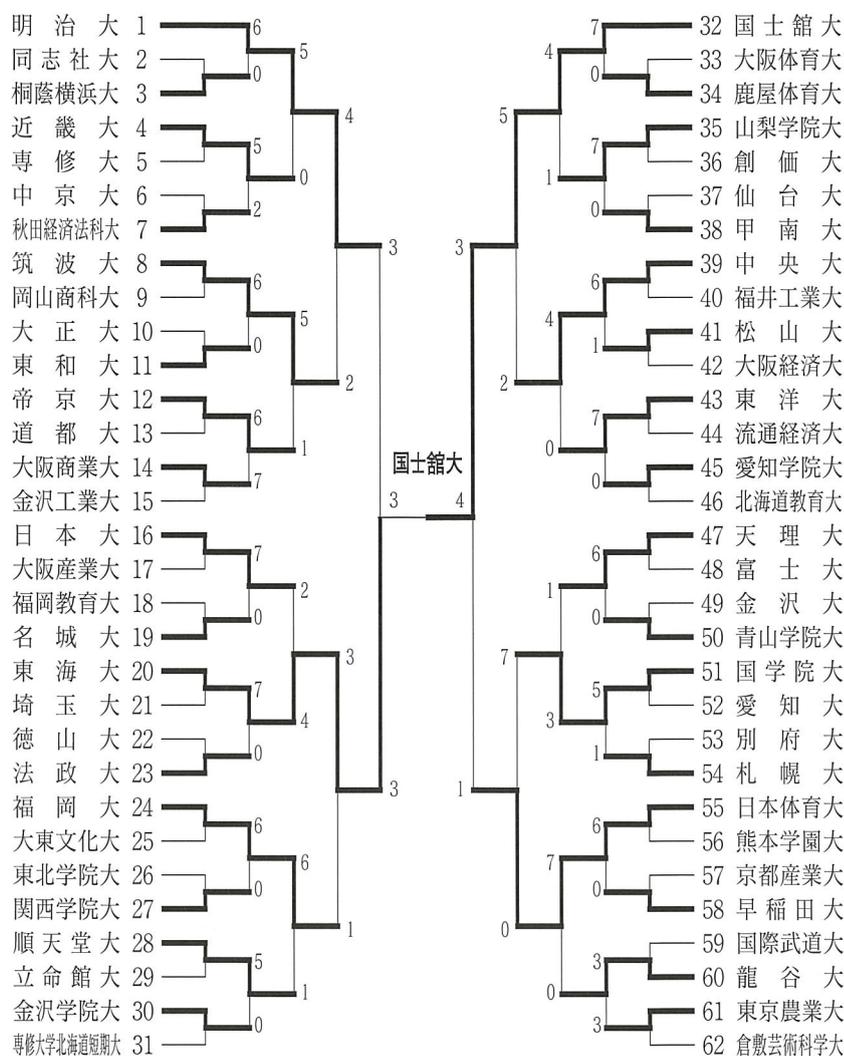
ラボルテ袖釣込腰を軸に大外、大内と攻めるが阿武捌く、一分過ぎ阿武の大内にラボルテうつ伏になる。阿武は大内刈から小内、背負と積極的に攻め試合をリード。残り時間十秒、攻めないラボルテに「注意」。ラボルテの最後の袖釣りを阿武がつぶしたところで時間。阿武一九九七年パリ、九九年バーミンガム大会について三度目の優勝であった。

### ひと皮むけた阿武の柔道

阿武が世界選手権三連覇という快挙を成し遂げたが、振り返ってみて試合内容は今大会が一番充実安定していたといえる。技の一つ一つに重みがついてきたこと、前技から大内刈、小内刈、小外刈の連絡、またこの逆、組際の大小内刈の型が阿武流のものになりかけているという事であろうか。いずれにしてもシドニーでの金縛りにあったような敗戦が今回の好調とどうしても結びつかない。

(吉田秀彦)

# 闘魂の記録 2002 (平成14) 年



## 第51回全日本学生柔道優勝大会

10月5・6日 日本武道館

隙あり！ 準決で苦杯

本大会、明治は好調、棟田・矢嵩を抱え連覇を確信して臨んだが、勝利の女神は他校に微笑んだ。日頃の練習に油断があったとは思わない。しかし自軍のポイントゲッターの存在を意識した選手たちの微妙な心理が戦い方に現れていたことは否めない。この轍を二度と踏んではなるまい。

### 〔二回戦〕

明治大学 6-0 桐蔭横浜大

### 〔三回戦〕

明治大学 5-0 近畿大学

### 〔四回戦〕

明治大学 4-2 筑波大学

### 〔準決勝戦〕

明治大学 3-③ 東海大学

(内容負)

矢嵩雄大 ○	横四方固	小野俊教
宮城充宏	背負投	○鈴木貴士
河原正太	大外刈	○今井敏博
井上智和	反則	○松崎建司
泉 浩 ⊖	内股すかし	市川裕治
棟田康幸 ○	払腰	樋谷忠司
保立勝	引分	長利功三

## 第21回全日本学生体重別選手権大会

10月4～5日 日本武道館

90 kg級

優勝 泉 浩 (明大)

66 kg級

優勝 寺居高志 (明大)

全日本選抜体重別選手権大会

4月20日 福岡市民体育館

100 kg超級

優勝 棟田康幸(明大)

90 kg級

優勝 矢野雄大(明大)

全日本柔道選手権大会

4月29日 日本武道館

準優勝 棟田(明大)

全日本選手権大会出場者

棟田康幸、吉田秀彦、高山一樹、猿渡琢海

全日本ジュニア体重別選手権大会

6月10日 講道館

81 kg級

優勝 河原正太(明大)

100 kg超級

優勝 澤田敦士(明大)

講道館杯全日本選抜体重別選手権大会

11月16日 ポートアリーナ

90 kg級

準優勝 泉浩(明大)

73 kg級

三位 渡辺一貴(明大)

66 kg級

三位 寺居高志(明大)

柔道競技アジア大会

9月29日 韓国・釜山

100 kg超級

優勝 棟田康幸(明大)

90 kg級

優勝 矢野雄大(明大)

ジャパンカップ柔道国際大会

10月21日 東京

90 kg級

優勝 矢野雄大(明大)

ベルギー国際柔道大会

2月2日 ビシー

66 kg級

優勝 寺居高志(明大)

イタリア国際柔道大会

6月3日 ミラノ

100 kg超級

優勝 棟田康幸(明大)

ハンガリー国際柔道大会

3月2日 ブダペスト

100 kg超級

優勝 棟田康幸(明大)

カザフスタン国際柔道大会

5月10日 ウラリスク

90 kg級

優勝 泉浩(明大)

# 闘魂の記録 2003 (平成15) 年

## 第52回全日本学生柔道優勝大会

6月28・29日 日本武道館

準々決勝で敗退

〔準々決勝戦〕

明治大学 2-4 天理大学

優勝 国士舘大学

90 kg級

優勝 泉 浩(明大)

〔準決勝戦〕

66 kg級

寺居高志○ 技有り

(日本・明大)

アダルメ  
(カザフスタン)

〔決勝戦〕

寺居高志○ 反則勝

(日本・明大)

アレンピシア  
(キューバ)

〔準決勝戦〕

90 kg級

泉 浩○ 技有り 朴 先雨  
(韓国)

(日本・明大)

〔決勝戦〕

泉 浩○ 指導2 バレット  
(ブラジル)

(日本・明大)

## 第22回全日本学生柔道体重別選手権大会

10月4日 日本武道館

73 kg級

優勝 渡辺一貴(明大)

66 kg級

二位 寺居高志(明大)

## 第22回ユニバーシアード大会柔道競技

8月28・29日 韓国・大邱

66 kg級

優勝 寺居高志(明大)

## 講道館杯全日本体重別選手権大会

11月16日 千葉ポート・アリーナ

90 kg級

優勝 泉 浩(明大)

## 第36回全日本選抜柔道体重別選手権大会

4月6日 福岡市民体育館

90 kg級

優勝 矢寄雄大(了徳寺学園職員)

三位 泉 浩(明大)

## 全日本柔道選手権大会

4月29日 日本武道館

全日本選手権大会出場者

井上智和、泉浩(学生)、棟田康幸、高

山一樹、矢寄雄大

60 kg級

優勝 田中 誠(明大)

90 kg級

優勝 日當浩二(明大)

## 第35回全日本ジュニア体重別選手権大会

9月21日 埼玉武道館

## 世界柔道選手権大会

9月11～14日 大阪城ホール

棟田 優勝

100 kg 超級

優勝 棟田康幸 (日本・警視庁)

〔二回戦〕

棟田康幸○ 反則 トンコフ  
(日本・本警視庁) (アルガリア)

〔三回戦〕

棟田康幸◎ 優勢勝 トメノフ  
(日本・警視庁) (ロシア)

〔四回戦〕

棟田康幸○ 内股透し ミラン  
(日本・警視庁) (イラン)

〔準決勝戦〕

棟田康幸○ 内股 ソトニコフ  
(日本・警視庁) (ウクライナ)

〔決勝戦〕

棟田康幸○ 指導3 バンデルギースト  
(日本・警視庁) (オランダ)

両者技が出ず一分二十秒「指導」が出る。姿勢よく組む棟田に対しバンデルギーストの姿勢が極端に悪く、偽装攻撃で「指導3」棟

田優勝

90 kg 級

三回戦敗退 矢野雄大 (了徳寺学園職員)

## 世界女子柔道選手権大会

9月14日 大阪城ホール

阿武教子輝く四連覇

女子78 kg 級

優勝 阿武教子 (日本・警視庁)

〔二回戦〕

阿武教子 指導 マトロワ  
(日本・警視庁) (ウクライナ)

〔三回戦〕

阿武教子○ 大外返 尹玉峰  
(日本・警視庁) (中国)

〔準決勝戦〕

阿武教子 大内刈 サンミゲル  
(日本・警視庁) (スペイン)

〔決勝戦〕

阿武教子 指導3 ラボルデ  
(日本・警視庁) (キューバ)

大会四連覇をかけて緊張感のある試合開始であった。阿武慎重に切り過ぎたが先に指導

を受ける。阿武これを境に積極攻勢に転じるとラボルデの狩の態勢、偽装攻撃に次々と指導が出て「指導3」。時間となり阿武が見事に大会四連覇を果たした。

## 嘉納杯国際柔道大会

1月11日 日本武道館

100 kg 超級

優勝 棟田康幸 (日本・警視庁)

90 kg 級

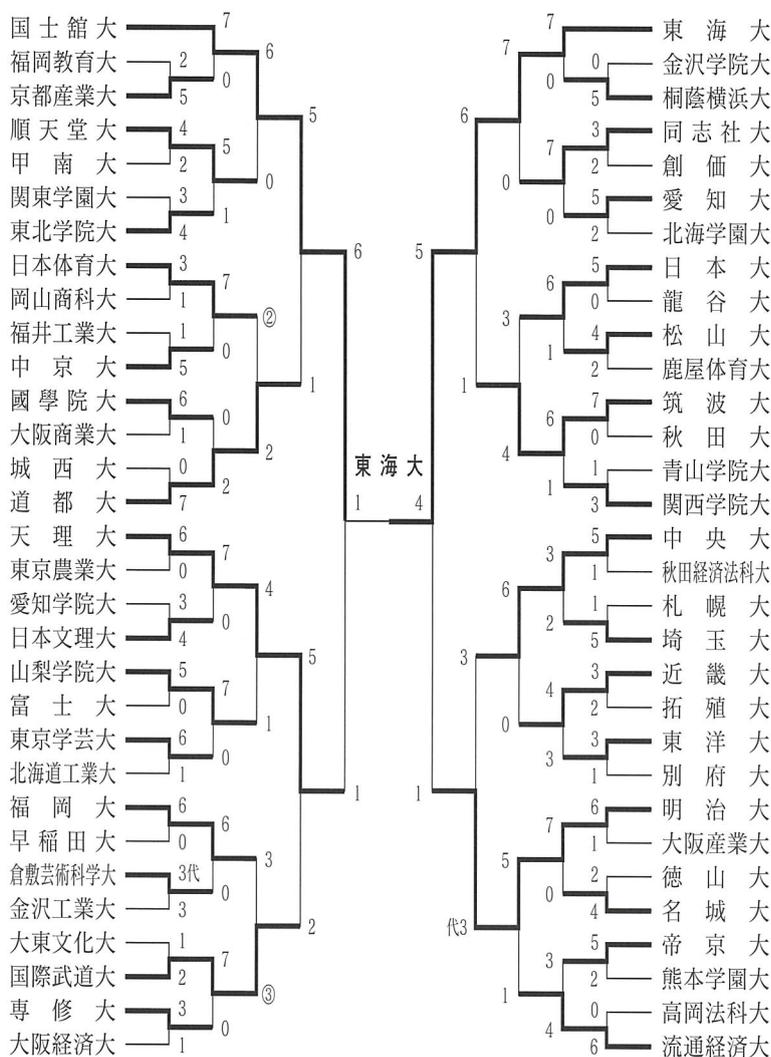
優勝 矢野雄大 (了徳寺学園職員)

二位 泉浩 (明大)



左・矢野、右・棟田

# 闘魂の記録 2004 (平成16) 年



## 第53回全日本学生柔道優勝大会

6月26・27日 日本武道館

明大は、大阪産業大、名城大、流通経済大を破り、準決勝に進出した、中央大に辛勝。準決勝に進出したが、東海大に5-1で敗れた。

## 第6回学生柔道体重別団体優勝大会

11月6・7日 尼崎市記念公園総合体育館

初戦、札幌大に7-0で圧勝。山梨学院大、福岡大を破り、準決勝に進出したが、東海大に決勝進出をばまれた。優勝は東海大、準優勝が国士舘大、三位が明大と天理大。

## 全日本学生柔道体重別選手権大会

10月2・3日 日本武道館

73 kg級

優勝 海老沼聖

二位 渡辺一貴

## 世界ジュニア柔道選手権大会

10月14～17日 ハンガリー・ブダペスト

81 kg級

二位 花本隆司

## 講道館杯全国選抜体重別選手権大会

千葉ポータルアリーナ

73 kg級

二位

渡辺一貴

全日本選手権大会出場者

棟田康幸、泉浩、高山一樹、河原正太

## アテネ・オリンピック

8月13～29日 ギリシャ・アテネ

## 阿武、宿願の金、初出場の泉、銀

三度目の正直、阿武教子が遂にオリンピック金メダルの宿願を果たした。また、唯一の学生選手、明大主将の泉浩も善戦し、銀を獲得、明大柔道の存在を世界に示した。

女子78 kg級

優勝 阿武教子

(警視庁 平成十一年文学部卒)

男子90 kg級

準優勝 泉浩

(経営学部四年生)

## 明大の技 阿武教子の内刈

阿武教子の戦歴が語られる時、平成十六(二〇〇四)年、悲願のオリンピック金メダルを獲得したアテネでの決勝戦がクローズアップされることは間違いなからう。

袖釣り込み腰で相手選手が大きく弧を描く決勝戦の映像が、後年のスポーツ番組などで繰り返し放映されることは想像に難くないが、VTRを見るまでもなく多くの人に鮮烈な記憶を刻んだ見事な技であった。

しかし、阿武が明大柔道部初の女子部員となつて以来、長くその成長と闘い振りを見守つてきた者にとっては、彼女が七八kg超級で世界の強豪と真っ向勝負していたころの火のような内刈が忘れられない。

文字どおり体格が倍する相手選手に内股を放つ時、その小さな体は強烈な一発の弾丸となつて相手に打ち込まれる。そして相手は刈り倒されるのではなく、急所を突いた爆発

によって後方に吹き飛ばされる。

阿武の柔道は豊富な稽古量と抜群の身体能力に裏打ちされたスピードと力感溢れる体捌きが身上だが、技術的には、基本どおりに相手胸前をつかんだ釣手を基点とした崩しと掛けポイントとなる。阿武の内刈における釣手は、アッパーカット気味に相手顎を突き上げて崩す場合もあるが、ほぼ真後ろに向かつて相手胸前を突き崩す場合が多い。イメージとしては相手の胸板を突き抜く勢いと言つたほうが適切であろう。

比較的身長に恵まれない選手が使う基本どおりの内刈であるとも言えるが、幾万回も繰り返し体得したベーシックな技ほど強いものはない。

内刈は積極的に前に出ながら展開する柔道には必須の技であるが、女子部員がない明大柔道部に自ら厳しさを求めて入部した阿武の前向きなチャレンジ精神を象徴する技でもある。この技に冴えがある試合では、阿武は全力を出し切ることができる。

アテネ・オリンピックの準決勝戦。最後の勝負どころで放たれた内刈で相手が倒れた瞬間、その冴えは決勝戦を待たずに金メダルを予感させるものだった。

アテネで何を感じ、今何を見据える

明大スポーツ 長谷川 聡

世界中が注目したアテネ五輪。その表彰台の上には明大の泉主将の姿があった。胸に輝く銀メダル。それは九〇kg級日本人初のメダルであり、日本百個目のメダルと歴史に名を刻んだ証。周囲からは初挑戦で偉業を成し遂げた若武者に惜しめない拍手が送られた。大歓声に包まれる場内。だが泉は表情を崩さない。ただ前を見詰めている。その瞳はここが決してゴールではないことを表していた。

初戦からの勢いそのままに一気に駆け上がったアテネ五輪決勝の大舞台。「金を獲る」、決意を秘め挑む。序盤から果敢に攻めるもズビヤダウリ（グルジア）の力に圧倒され、抱え上げられた泉はそのまま畳に叩き付けられた。「やっちゃった…」。天井を見上げながらアテネ五輪挑戦の終えんをかみしめる。しかし意外なほど、心は落ち着いていた。「この銀で今の実力が分かった」。まだ自分は発展途上、冷静に今大会を振り返る。自問自答を繰り返すの中で差し込む一筋の光を見つける。

それは激戦の中で感じた感覚。準決勝、二〇〇三年世界選手権大会王者ファン（韓国）を破った会心の背負い投げ。考えて出せた技ではない。自然と体が反応する「まさに無我の境地だった」。泉は確信した。「これができ

れば理想へと近づける」。幼い頃から変わらなず求め続けているもの、「勝ち続ける選手になりたい」。名譽や称賛ではない。〃勝ち続ける〃という「最も困難であり、最も苦しい」もの。それだけを求め続け、遂にアテネでの指針を手に入れた。つかんだ手応えを胸に帰国。その夜にはすでに懸命に練習に励む泉がいた。アテネで見えたものを現実にするため、必死に己を追い詰めていく。「強い気持ちが必要なければやれない」。その際限なき向上心は銀メダリストとなっても何も変わらなない。「こつこつ努力を積めるのは泉の強み」（秀島監督）。決して「天才肌ではない」（持田顧問）。だからこそひたむきな努力を積み重ねる。理想への兆しを追い求め、今この瞬間も己を磨き続ける。

これからも続く泉の飽くなき探求の旅。向かう先には来年の世界選手権大会、そして北京五輪が立ちはだかる。どれも険しい道だろう。だが泉には「どんな壁にぶつかっても乗り越えられる強さがある」。理想へ続く光を見詰

め、泉は歩いていく。どんなときも前を向いて、一歩一歩…。

学苑会（二部）柔道部の歩み

一九六二年卒 坏あくつ 昭二

明治大学の沿革によれば、戦後新制明治大学として認可された昭和二十四（一九四九）年に第二部（夜間制）が設置されたと記録されています。しかし、平成十六（二〇〇四）年に学生募集停止、三年後にはその歴史を閉じることとなりました。

二部柔道部が実質卒業生を送り出したのが昭和二十九（一九五四）年と記録されています。私は創部後間もない昭和三十二年度に入部、そして二部柔道部に入りました。当時、昼働き夜学ぶ学生は半ば当たり前で、まだまだ「衣食」が充分満たされない時代でしたが、毎年二十〜三十人の新入生が入部、途中で退部者も多かったが、昭和三十二年度は十名を超える卒業生を送り出しました。

入学当時、明治大学で学ぶという事もさることながら、明治の道場に行ける、そこで稽古ができることに憧れました。当時、体育会柔道部OBには全日本柔道選手権の覇者がお

られ、現役の柔道部は、ほぼ毎年日本の全大学の頂点に立ちました。高校で柔道をやった者なら知らない人はいない著名な選手が沢山いましたし、道場で初めて神永先輩を見た時は、眩しさを感じたものでした。

二部柔道部を指導したのは葉山三郎部長と工藤欣一監督でした。当時、葉山先生は大学の職員だったと記憶していますし、工藤監督は大学を卒業して間もなく、当時合宿所を兼ね多くの先輩が学生時代を過ごした、赤羽の社会福祉法人澄水園の職員として勤めながら二部柔道部創設以来、長期に亘り教えていただきました。葉山先生は言葉少なでしたが、黙って道場に立って練習を見ておられるだけで恐い存在でした。しかし、もつと恐ろしかったのは工藤監督で、二部がスタートした地下道場には真っ先に稽古着に着替えた監督がおり、それをそつと見て稽古をせずに帰った部員がいるという逸話が残っています。葉山先生の後は神田和夫先生が指導を下さいました。

工藤監督は私が学生だった頃、毎日道場に来ました。そして「一日休めば二日後退する…」、そして柔道を通した人造りを説き、稽古は理屈抜き…と当時明治の黄金時代を築かれた選手達の稽古振りを話されました。我々

二部学生の練習と曾根先輩、神永先輩に代表される選手の練習の激しさは桁違いで、工藤監督自身が「曾根さんの胸ぐらを見ただけで吐き気がした」という話を鮮明に記憶しています。一部の学生が稽古を終えた後、夜九時過ぎまでが練習の時間、風呂を浴び、洗濯機がなく、ブラシで先輩の柔道着を洗って道場を出るのはいつも夜十時過ぎでした。

その工藤先生の発案で、二部同士の定期戦が日本大学工学部と始まり、その数年後には法政大学との定期戦が始まりました。そして、比較的試合数の少ない二部学生に連盟ができ、東日本二部学生柔道、そして全日本二部学生柔道大会へと発展したと記憶しています。また、理屈抜きの発想が、禅道場の「只管打坐」よろしく精神面を鍛えるとして、新入生を迎える毎年五月、夜通し凡そ三十キロを歩く「江ノ島強歩行軍」を計画、毎年実施されてきました。

体育会柔道部とのパイプ造りも工藤監督が積極的に進められました。当時、試合数も少なかった為、ほぼ毎年地方に遠征試合を行いました。殆どが工藤監督の人脈で関西大学（大阪）とは二部同士の定期戦を交互に行い、東北、北海道、広島と、体育会OBの先輩を頼つての実業団チームとの交流試合を行い、

時には体育会柔道部の若い選手にも応援参加していただきました。そして、二部の夜間の道場に一部学生やOBが指導に訪れるのも稀ではなく、オリンピック金メダルの川口選手「の技」を教えていただきました。そして、その最たるものが神永先輩でした。神永先輩はオリンピック出場前でも通常勤務、そして夜、二部柔道部と一緒に同じ道場で練習されました。当時、柔道をやるものは、このスーパースターだった先輩に一度でも稽古をつけてもらえる機会が夢であり、明治に学ぶ誇りでもありました。

こうした一部（体育会）の人々との交流が、後のOB同士の接点を拡大させ、「目黒合宿所」の建設プロジェクトへの参加、OBの懇親ゴルフ会、更には二部卒業生が拓いた西武グループ企業への就職ルートに体育会柔道部の卒業生が就職する等、幾つかのつながりに発展したと理解しています。

そして、今回の二部制の廃止に伴う学苑会（二部）OBの明柔会への合流が実現しました。百年の伝統と日本一の実績を持ち、数多くの会員を持つ明治大学体育会柔道部OB会「明柔会」に参加できる事は名誉なことであり、明柔会の皆様に深く感謝を申し上げます。

# 大学の枠を超えて

## 新時代の旗手、明大柔道部

是松恭治

(東大一九五八年卒)

昭和二十六(一九五二)年、学生柔道が復活して、二十年代後半から三十年代にかけての大学柔道は、各大学部再建から発展へと登り龍の勢いがあり、私立大学数校が激しく覇を競っていたが、その中で一頭地を抜いていたのが明治大学であった。二十九年、東大柔道部に入部した私が初めて明大柔道部の試合を観戦したのはその春の大学選手権予選を兼ねた東京都大会だったと思う。正確な記録がないので誤りがあればご容赦願いたい。選手は石橋、山尾、中野、河辺、渡辺(政)、渡辺(欣)、岩崎各氏の七名であったと記憶している。当時は食糧不足の時代で巨漢も肥満体もおらず、皆すらりとした引締った体格であったがどこか颯爽とした気迫が漲り、やはり格上だなど感じたことを覚えている。果たして試合になると皆平然とした表情で気負いもなく、きびきびとした体捌き、と見ていると電光石火の早技で一発で決める、一本。技は大内刈、小内刈、大外刈、内股、体落し等それぞれ個性的な得意技を持ち、その切れ味の鋭さは抜群である。全て七―〇、これぞ真の「新時

代の旗手」私の実感であった。このような強烈な印象を受けることは滅多にないがもう一度あった。

それは翌三十年の全日本柔道選手権大会のことである。戦後二十三年に始まったこの大会は旧武専出の柔道家の全盛時代の中で、戦後大学柔道の旗手として明大OBの金子泰興氏が、二十七年から出場し孤軍奮闘していたが、二十九年から明大後輩の曾根康治氏が加わり、三十年には金子、曾根、大野、石橋、山尾、河辺、渡辺(政)各氏、何と一挙に七名が明大から出場したのである。そして準々決勝に駒を進めた新鋭曾根選手が、東海の古豪、支え釣込足の名人伊藤秀雄選手を乾坤一擲内股で屠り、満面紅潮して走ったのを私は凝視していた。この一戦はまさに新しい時代の到来を告げるものであった。この年は曾根選手は準決勝で優勝者吉松選手に敗れたが、三十三年、遂に宿願の全日本選手権者となり、ここに新時代を画したのである。

話を少し戻して二十九年の秋、私は講道館の紅白試合に出場していて神永昭夫氏の十九人抜き、翌年、明大一年生の時の月並試合での十人抜きを目の前で見た。この時のことは彼の追悼文に書いたので繰り返さないが、その後彼の試合を特に注目していたが、いつ見てもその戦いは堂々たる正攻法、礼、姿勢、体捌き、技、いずれもすばらしかった。彼はまさに私の柔道のかくありたいと思っている姿を体現した人でひそかに尊敬していた。当時は彼との将来の深いご縁は知る由もなかったが―神永氏の時代も明大は徳山、比嘉氏等粒揃いで名選手がひしめいていたが、私のいう「新時代の旗手」の時代は曾根・河渡辺氏に代表される鋭い攻撃型、開拓型の群像で一時代を画し、次の強さの定着と安定期、攻守バランスのとれた安定型、重鎮型の群像の時代に入ったのではなからうか。

この時代のことをひき続き述べると紙面の制約を超えるので、ここで話を転じてこの時代の明大と東大との浅からぬ関係について、東大柔道部とOBの組織、赤門柔道倶楽部の会報『赤門柔道』をひもといてご紹介しておきた

い。

三十年夏、東大は戦後初の北海道遠征を行った。選手十三名、札幌北大連合、旭川国策パルプ、苫小牧王子製紙、室蘭富士製鉄を武者修業したが、この最終地で明大OBの末木茂さんに大変お世話になり、そのすばらしいお人柄に東大部長はすっかり魅了された。当時の富士鉄室蘭は入社早々の末木、宮崎剛（前慶大主将）両氏を含め五段四名で上位を固める強豪チーム、試合は先鋒から上位四名に至るまで二対一で東大がリード、五段の一番手宮崎選手は東大の阿南四将が道場狭しと走りまわって横捨身を連発する大健闘で引分けたが、二番手末木参将はさすがに大内刈一閃、続く副将、大将もとられ結局四対二で東大は敗れた。その夜は末木さんの案内で洞爺湖畔の会社の寮で大ご馳走になり、末木さんの熊を大内刈で倒した話や空手の大山倍達を手玉にとった話で爆笑、また爆笑、大騒ぎの中に楽しく遠征の幕を閉じたのであった。

翌三十一年、明大と東大の試合記録が『赤門柔道』にある。

東大 0—6 明大

先鋒 柘植 体落し ○安達

花本 優勢 ○比嘉

是松 体落し ○山崎

中堅 吉田 大外刈 ○神永

長浜 大外刈 ○浅野

副将 福島 背負投 ○徳山

大将 伊藤 引分 徳永

六月十七日、東京学生柔道優勝大会が講道館で行われた。第一回戦は優勝候補の明大と当たる。好敵見参、相手にとって不足はない。たとえ負けようとも「悔いのない」堂々たる試合をせんものと選手七名張切って臨む。結果

は六―〇で敗れたが、試合内容からみれば、気魄に満ちて実力を存分に揮っていた試合であった。特に伊藤は明大の大将徳永を押し気味に分け、また柘植、花本の食い下りも実に見事であった。この東大の善戦ぶりは講道館内の一つのトピックになったという。

この年の夏、東大は中国、四国遠征をした。選手十七名、倉レ岡山、東邦レ徳島、東レ愛媛、広島県警、三菱レ大竹と武者修業し、この最終地で明大OBの山尾英三さんに大変お世話になった。試合は山尾さんは監督で出場されず東大が七対五で勝った。『赤門柔道』には次の記録がある。

合同稽古、山尾さんの相手は誰によらず、大きく半円を画いて飛んでいる。夜、会社幹部と山尾さんが加わってにぎやかなコンパをした。山尾さんの余興は素人とは思えぬもので所作が堂に入っているのに感心、東大側は伊藤さんの小唄を先頭に是松、佐藤などが矢面に立って対抗した。

青春時代の楽しく、なつかしい思い出である。

## 明大を目指し切磋琢磨

渡辺喜三郎

（中央大一九五八年卒）

私は昭和十一年一月生まれで、明治大学の神永昭夫さんと同じ年の生まれですが学年は一年上になります。新潟から東京の中央大学経済学部に進学しました。当時を振り返れば、何はさておき東京で柔道ができることに胸を躍らせていました。中央大学の近くには講道館があり、明治大学や日本大学もあります。いろいろな道場に出稽古しましたが、中でも強豪が多い明治

大学への出稽古は今でも忘れることができない思い出になっています。柔道の一流選手が集まった稽古はレベルが高く、熱気がありました。負けず嫌いの私には、とても魅力的な雰囲気です。まさに「十分に稽古できる環境では日本で一番の明大柔道部」でした。もちろん、私は大いに鍛えられましたし、大学の違いを超えて友情を育むことができたし、多くのことを学んだと思っています。

私たちの世代には、明大に神永昭夫さん、日大に松下三郎さん、教育大に長谷川博之さんや猪熊功さん、関西では天理大に古賀正躬さん、米田さんなどそうそうたる選手がいました。これら各大学の柔道部には、当然のことながら特色があります。『柔道新聞』を発行されていた工藤雷介さんは、

「たとえば明大は、高校時代にトップクラスの選手が大勢入って、それを明大流に鍛えて鍛え抜くのであるが、天理大では第二の武専ばりで、高校時代の一流選手はもちろん集めるが、ここでは天理高を予備軍として鍛え、中大は菊池師範、山辺監督のコンビで、個性を尊重した独特の選手養成を行ってきた」と評しておられるが、まさしくその通りであったと思います。私たちは、学生大会や全日本大会で母校の名譽を賭けて火花を散らしました。

明大と中大の対戦で思い起こすことの一つは、昭和三十一（一九五六）年の全日本学生柔道優勝大会です。このときは、確か三回戦あたりでした。次鋒で出た私がいまず一本先取して、中堅の神永さんを取られてタイになり、次に中大の太田伸一が一本取り、副将は引き分け、大将戦では判定を奪われたものの内容差で前年覇者の明大に勝つことができました。中大は、準決勝戦で天理大学と対戦し、今度は逆に2-2の内容差で負けました。結局、この年の優勝校は日大を下した天理大学で、初めて優勝旗が箱根を越えた年でした。

個人戦では、翌年の昭和三十二年に、全日本学生選手権大会準決勝戦で神永さんと対戦しました。接戦で、延長二回、抽選で敗れました。決勝は、神

永さんと日大の松下三郎さんの争いとなり、延長五回の末、松下さんが勝利しています。

学生時代の試合の思い出は、あれやこれや、いろいろと浮かび上がってきます。時代背景としては、日本が戦後の混乱期を乗り越え、再び活気を取り戻してくる頃でした。現在と比較すれば、物質的な豊かさは劣りますが、精神的には一つの意気込みが社会全体にみなぎっていたように思われます。私たちは、東京で柔道に打ち込み、青春を謳歌していたように思います。明治大学柔道部は、私たちの学生柔道の中心に存在していました。戦後の学生柔道復活は、明治大学を軸に為されたといつて過言ではないといえます。私たちは、中大も、そして他の大学も、王座に君臨する明大を目標に、そして明大を倒すことを目的に、切磋琢磨しました。そのことが、結果として戦後、日本柔道の発展に大きく寄与したと、私は信じています。

近年も、明大は日本を代表し、世界で実績を挙げる選手を多数輩出しています。明大出身の方々は、柔道界のいろいろな所で、普及と発展のために尽くされています。私は、以前は財団法人日本武道館の仕事を通じて、近くは昨年度まで東京学生柔道連盟会長を務めておりましたので学生柔道を通じて、そのことを実際にこの目で見て、肌で感じてきました。柔道に育てられ、柔道を愛好する一人として、その社会的貢献に対して感謝申し上げます。

## 明大柔道部の永遠性を願う

山岸 均

(東洋大一九六一年卒)

戦後、学生柔道が復活した時、明大には全国津々浦々から俊秀・精鋭が関ヶ原の東軍に馳せ参じるように集結した。侍大将は人も知る曾根康治であった。その麾下には綺羅星の如き若武者が勢揃いした。門屋賢悟、渡辺政雄、渡辺欣嗣、末木茂、工藤欣一、山尾英三、等々。全日本で敵するものなく、如何なる相手が現れようともまさに鎧袖一触であった。

古豪日大は巨漢斉藤幹朗を柱に副将三井浩柱、新人松下三郎、木村忠雄が挑んでも明大の牙城に迫れず、新興天理短大は今村春雄、古賀正躬らの九州決死隊も一敗地にまみれた。

行く年も来る年も明大破竹の勢いは続いた。しかして後人を守る士者には又、後に大きく名を成す者が控えていた。

徳永三幸、野田健次郎の支えには至宝神永昭夫が名のりをあげた。徳山操、比嘉良幸、甲斐福男、小林健児を従えた布陣は鉄壁であった。

明大の快進撃はまだ続く。業師篠原一雄は苦しみながらも大橋武彦、渡辺邦雄らと共に覇権を次代へつなく。

学生選手権二連覇を果たす重松正成は僚友宮崎敬一、山口友孝らに天才田中章雄、高田誠之助、佐藤治、神永正夫を加えた陣容で王座を確保。

ようやく打倒明大を揚げた東西各大学を更に圧倒するかのよう天下を睥睨した。

そして朝田紀明、神屋興介、田村興靖、酒井知、次いで剛力石原賢信、更に全日本中量級選手権者関勝治、そして全日本チャンピオン坂口征二、村井

正芳、上野武則、富田弘美、山本裕洋、篠巻政利、須磨周司、河原月夫、オリンピック・チャンピオン上村春樹らが明大の伝統を守り、歴史をつくった。覇権は一人明大だけのものではないことは当然だ。明大を打倒し粉砕する大学が台頭してきても何ら不思議ではない。が、筆者はあの時代の、あの美しく勝つ明大武士集団の活躍が脳裡にあり、柔道がかくも戦慄的なものと知らされたせいも、明大柔道の永遠性を願わずにいられない。

近年、体育学部を持つばかりがただ勝つだけの柔道を演じ味もそっけもない勝利に酔っているのを見るにつけ、昔日の明大柔道の技と心意気を語ってやりたい衝動にかられる。学生柔道のアルバムの中からセピア色の明大柔道の写真を取り出して追憶に浸っているのではない。学生柔道の失われた典型をたずねているのだ。類型は掃き捨てるほどある。典型はやはり駿河台のあの主の友の道場にしかない。そこでは殺気が醸成され、男の美学が生まれている。これこそ実は明大柔道の歴史と伝統なのである。

## 打倒明治を目標に頑張る

古賀 武

(日大一九六二年卒)

我々の時代は国際柔道大会はまだ無く、全日本柔道選手権大会、全日本東西対抗柔道大会と、母校の名譽をかけて火花を散らす学生大会でした。

私は、実は高校時代は明治大学柔道部に憧れ「大学は是非明大柔道部へ」と自分なりに夢を描いておりました。郷里の甲斐福男先生(明大柔道部OB)には、当時大変お世話になり、ほぼ明治大学へ入学決定していたのですが、ちよっとしたボタンの掛け違いから、結果的に日本大学へ入学致しました。

今思えばその方が良かったと思います。その当時の明治大学柔道部は強豪揃いで、重量級の選手がぞろぞろいました。私のような中量級の選手は潰されていたかもしれません。

このような事情があったので、明治大学柔道部を非常に意識して練習に励みました。

学生時代の試合の思い出は、あれやこれやとたくさんありますが、特に団体戦では、明大戦との数々の試合が、今でも脳裏に焼き付いております。全日本学生柔道優勝東京大会では日大が宿敵明大を破り三回連続優勝することができましたが、全日本学生柔道優勝大会では全て敗れ、明大二回、天理大一回優勝と口惜しい思い出があります。

個人戦では、特に田中章雄君との対戦が思い出されます。全日本学生柔道選手権大会で、昭和三十四（一九五九）年、大学二年生の時、準決勝で対戦し、私が勝ち、翌年も準決勝で対戦し、田中君が勝ち、さらに昭和三十六年には優勝戦で対戦し、この時は私が勝ち、優勝することができました。

但し、その年の第三回世界柔道選手権大会日本代表決定戦では田中君に敗れました。田中君とは、学生時代の対戦成績は五分五分だったと記憶しています。明大田中主将、日大吉賀主将として互に母校の名誉の為に数々の試合で死闘を尽くした記憶があります。

今思えば、打倒明治を目標に頑張れたのが良かったと思います。しかし、明治の壁は厚く、最後の目標である全日本学生柔道優勝大会では優勝することはできませんでした。やはり明大柔道部は私たち学生柔道の中心的存在でした。

## 伝統の底力

植村健次郎

（慶応大一九六三年卒）

私は昭和二十八（一九五三）年に中学に入学し、しばらくしてから柔道を始めました。その当時の明治大学は、石橋毅次郎、渡辺政雄、渡辺欣嗣、河辺一彦選手等を擁し、圧倒的な強さを誇っておりました。明治大学各選手の颯爽とした試合振りに、中学生でありました私は強く憧れを抱いたものでありました。明治大学は全日本学生柔道優勝大会で、十六回の優勝を飾っています。多くの強豪大学があるなか、五十余年にわたる学生柔道優勝大会の歴史の中で最多の優勝回数を誇っています。

百瀬恵夫先生が、明治大学はスカラシップ制度が無く、体育系の入学希望者にも何の特典も無い旨のことをお述べになったことを聞いた記憶があります。明柔会が学生支援の全てを行っているとのことで、いわゆる体育学部を持つている強豪校とは大きな違いがあることを知りました。そのような状況下での明治大学の頑張りは特筆に値するものであります。

私が大学生の頃は、強豪校である明治大学や日本大学に出稽古をお願いしておりました。お茶の水の明治大学の道場に向く時は何となく足が重くなり、口数も少なくなった事が思い出されます。そのような出稽古にて明治大学を訪問した際、丁度道場に神永昭夫先輩が来ていらっしやいました。神永先輩は私共から見ますと雲の上の人でありましたから、同じ道場に立っているのだということだけで興奮を抑えることができませんでした。その際、幸運にも稽古をつけていただく機会を得ましたが、「赤子の手をひねる」という表現がピッタリのような乱取りだったと記憶しています。

ベン・ナイトホース・キャンベル氏（上院議員）が明治大学において数年間にわたり柔道修行を積んでいたという事実は、明治大学柔道部の長い歴史の中の一つとして輝かしいものであります。そのキャンベル氏が平成八（一九九六）年十一月に明治大学より名誉博士号を授与されるため来日した際、当時社団法人全日本学生柔道連盟の関係者として、連盟が事業の一つとして実施している教養講座の講師にお招きしました。その時のキャンベル氏の演題は「柔道、日本そして政治」というもので十一月十三日午後六時～七時半まで、霞ヶ関の東海大学校友会館にて行なわれました。キャンベル氏は、自身が不良少年であったが、柔道によって人生が変わったという趣旨の話なさを、政治家でありながら政治に関する話は二割位しかなさらなかったと記憶しています。

最近の情報によりますと、キャンベル氏は癌で闘病生活をしており、議院生活を今期限りで勇退なさり、故郷のコロラドの牧場に帰って、ご家族と余生を送ると聞いております。今後のご健勝をお祈りしたいと存じます。

次に私が公式試合にて対戦した明治大学の各々の選手との試合について触れてみたいと思います。大学三年生の時、東京学生優勝大会の準々決勝で明治大学と対戦を致しました。昭和三十六年五月末のことだったと思います。確か私は先鋒だったと思いますが、相手は同期の朝田紀明君でしたが、小外刈で技有りを取られて負けました。

同じ年の六月、全日本学生柔道優勝大会にてまた明治大学と対戦することになりました。先鋒が引き分けた後、私が次鋒に出場致しました。対戦相手はやはり同期の神屋興介君で、東京出身の大型な選手でした。試合開始後とつさに仕掛けた支釣込足にて一本勝ちを取ることが出来ました。この試合は一对二という結果で、慶応が明治大学に最も善戦したものでした。この大会の優勝は明治大学でありました。

その秋の大阪での全日本学生選手権の三回戦にて高田誠之助先輩と対戦し

ました。私の方が体格は一回り大きかった記憶がありますが、高田選手は大変重心が低く、安定した柔道をなさる方でした。開始後何分後か覚えていませんが、左の大内刈を掛けたところ見事に返され、一本負けをしました。しかし高田先輩は三位になられたと思います。最後に対戦した明治大学OBの方は大林誠選手です。一九六四年五月のニューヨークで行われた全米柔道選手権のことでした。大林選手は私の一年上の昭和三十七年卒で、卒業後直ちに渡米しカリフォルニア州サンノゼ大学に留学され、前年の全米大会にてやはり明治大学出身の篠原一雄選手と優勝を争ったと聞いておりました。二〇〇ポンド級（九〇kg級）の決勝にて対戦しました。大林選手は決勝まで見事な内股で全て一本勝ちを収めて上がってこられました。一方、私のほうはようやくの優勢勝ちで苦戦をしながら決勝までたどり着いたという感じででした。試合は開始後すぐ掛けた私の大内刈が技有りとなり、その後試合終了まで逃げ回るといふ展開でした。途中場外に一度たたきつけられましたが、当時の審判規定にて場外判定となりました。今の審判規定では完全な一本だったと思います。そして時間となり私が技有り優勢勝ちとなりました。ちなみに重量級（二〇〇ポンド以上・無制限）に出場した私の兄の剛太郎はジョージ・ハリス、カナダのロジャース等に勝ち、優勝しました。ロジャース選手はその秋の東京オリンピックにて決勝で猪熊選手と対戦し、銀メダルを獲得した実力者でした。またジャーナリストで友人の古森義久君も一六五ポンド級で三位に入賞したことも大変嬉しいことでありました。

平成十六（二〇〇四）年八月のアテネ・オリンピックでの阿武教子選手の頑張りは見事であり、感動的でありました。九〇kg以下級の泉浩選手のすばらしい若武者振りと合わせて、明大柔道伝統の底力を世界に示したといつてよろしいと思います。

（二〇〇四年十月二十日記）

## 難攻不落の明大柔道部を破った日

片岡 安

(早稲田大一九六三年卒)

戦前・戦後を通じ、明大柔道部は学生柔道界の頂点に君臨し、常に学生柔道を牽引してきました。幾多の名選手を日本の柔道界に送り出し、斯道発展に大きく寄与してきたことは、言うまでもありません。私の柔道戦歴の中で生涯忘れることができない思い出となった一戦は、やはり強豪明大との試合です。

昭和三十八(一九六三)年東京学生柔道優勝大会、準々決勝での明大戦。この年は東京オリンピックを翌年に控え、柔道が五輪の正式種目に決定し、柔道ブームに沸いた年でもありました。当時の明大は名実共に学生柔道界の頂点に立っており、その年の全日本選手権大会出場選手五名(坂口、村井、関、山本、鳥海)を擁し、初戦から他校を圧倒していました。

明大の先鋒村井選手は東京オリンピック重量級候補選手(プレ・オリンピック重量級優勝者)、対するは早大伊藤。ともに組んだら村井選手断然有利なるも、極端な右変形の伊藤にてこずり、引分けとなる。

早大の次鋒荻野は、全日本選手権大会で並みいる大型選手を相手に活躍した闘将。関選手に対し猛然と攻め善戦、互角の試合をするも、さすが関選手、荻野は後半一瞬の隙をつかれ後腰でポイントを取られ、惜しくも優勢負けとなる。

五将の早大平井と明大鈴木選手(同じ静岡県で高校時代、私のライバルであった)は互角の戦いに持ち込み、引分けに終わる。

次に、中堅である私(片岡)が、身長一九三cm、体重一一〇kg、明大屈指

のポイントゲッターである巨漢坂口選手(昭和四十年全日本柔道選手権優勝者)と対戦する。試合開始直後、長身の坂口選手に対し双手刈りを仕掛けるも両者もつれ場外へ、再び試合場の中央に戻り、一瞬の隙を突いた右一本背負投げが決まり一本勝ちとなった。早大ベンチはもちろん、私自身も全く信じられない一本勝ちであった。

三将の早大主将加藤はインターハイ優勝経験のある豪の者、一九〇cm余の明大山本(忠)選手を相手に良く戦うも優劣なく、明大にとっては手痛い引分けとなる。

早大の副将は石井(千)、対する明大は高校時代から将来を期待され全日本学生選手権を制覇した強豪石原選手。明大の劣勢を挽回せんと攻めまくるも、受けの強い石井、これをしのぐ大健闘をし、ほぼ互角の戦いで引分けとなる。

一対一で迎えた大将戦、早大は山崎、対する明大は主将菅原選手、明大側からは盛んにゲキが飛ぶ。両者もつれあつた際、菅原選手が肘関節骨折という思わぬ怪我で痛み分けとなり、常勝明大にとってまさかの敗退となった。

「打倒明大」は当時から他校の最大の目標であったが、この東京学生柔道優勝大会において、我々は初めて難攻不落の明大を一対一の内容勝ちで破ることができた。長年の宿願であったこの勝利に早大陣は沸きに沸いた。

我々は全日本学生柔道優勝大会決勝リーグにおいて再び明大と対戦したが、実力の差は如何ともし難く四対〇で完敗する。この大会で明大は三連覇に輝いた。

その後、昭和三十九年早大を卒業し、多くの明大柔道部OBの素晴らしい方々の知遇を得ることが出来ました。

まず、挙げなければならぬのは、神永昭夫さん。柔道の実力は言うまでもなく、人格の高潔さ、優れた見識、誰彼なしに対する優しい心遣い、全てにおいて不世出の偉大な柔道家でありました。私は早大卒業後、欧州(イタ

リア、英国)で約四年余柔道指導をしておりましたが、帰国後、久しぶりに神永さんの所にご挨拶に伺い、今後の自分の身の振り方について相談をしました。当時、大脳生理学で有名な、武田豊専務(新日本製鐵)を紹介され、これがご縁で(株)トーメンに入社することになり、神永さんには保証人にもなっていたいただきました。商社マンとして、その後長年にわたり、神永さんと同じ鉄鋼関係の業務に携わることになり、折にふれ、神永さんの薫陶を得ることができました。

柔道指導の海外滞在中においても、素晴らしい明大柔道部OBの皆様と付き合いをさせていただきました。チュニジアで柔道の指導に尽力され、同国における日本柔道の普及に貢献、今でも多くの弟子に慕われている押切義春氏、スペインで活躍されている鶴沢俊康氏、神永さんの明大全盛時代に副将をつとめられた業師の富賀見真典氏はパリで熱心に柔道指導をされておりました。同氏はフランス滞在中、ヨーロッパ各国から柔道の強者が集まった南フランスでの柔道講習会で、欧州の柔道界で赤鬼の異名を持つ巨漢ルスカ(世界選手権保持者)を豪快な大外刈、背負投で投げ飛ばし、フランスの柔道関係者を唖然とさせていたものでした。

欧州滞在中には、講道館少年部育ちで、麒麟児と謳われ、全日本柔道選手権大会でも多彩な技で活躍された、田中章雄氏とも友好を深めさせていただきました。同氏は私と時を同じくして、ベルギーで国家のコーチをされておりました。当時、講道館から柔道指導のため欧州に派遣され、ベルギー在住の安部一郎先生(現講道館参与)の下で共に選手強化に汗を流したものでした。

商社入社後しばらくして、駐在員として中近東(サラジアラビア)に派遣されましたが、奇しくもパリでお世話になった富賀見氏も中東のパリと言われるベイルート(レバノン)で柔道の指導をされており、大分弁丸出しの富賀見氏と、懐かしく再会することができました。同氏とは家族付き合いする

仲で、よく地中海で泳ぎを楽しみましたが、柔道の業師であるばかりでなく、驚くことに素潜りの名人でもありました。瞬く間に大きな蛸(たこ)を仕留め、ゆでた蛸を海辺で、わさび醬油で食べるのは、日本食に飢えた中近東の駐在員にとって最高のご馳走でした。また、鳥海又五郎氏も当時ご家族でサウジアラビアの首都リヤドに柔道指導の為に滞在されており、熱砂の同地で黙々と柔道指導に励む姿には敬服しました。

柔道を通じて、このように国内外に優れた指導者を輩出している名門明大柔道部のさらなる発展を念じて止みません。

## 打倒明治を目標に稽古

藤猪省太

(天理大一九七三年卒)

明治大学柔道部は、学生柔道界においては全日本学生優勝大会をはじめ全日本学生選手権大会や全日本学生体重大会などで、いまままでに、団体・個人ともにナンバーワンの実績をたくさん残されておられます。周知のように学生柔道界の名門中の名門であるわけですし、また、学生柔道界のみならず日本柔道界を支えてきた中心的な団体のひとつでもあります。

そしてオリンピック、世界選手権大会などの重要な国際大会においても、輝かしい成果を残して「明治大学の柔道ここにあり」を示されました。

また卒業された方々の活躍されている範囲はとて広く、柔道界のみならず財界をはじめ幾多の分野での社会貢献の実状を見聞きしている次第です。まさに全国の大学柔道にも多くの模範を示されておられます。

私が母校の天理大学柔道部員だったころは常に「打倒明治」を目標にして

毎日の稽古を積んでいました。目標が大きかったため、天理大学も好成績を残すことが出来ましたし、明治大学と並んでオリンピック、世界選手権大会などで好成績を修めることも出来ました。我々、天理一門は、明治を好敵手として切磋琢磨し試合に臨んできたことが結果として好成績につながったと思っているとあります。

## 戦いに臨む姿勢を学ぶ

齊藤 仁

(国士館大一九八三年卒)

明大柔道部で稽古をした者なら誰しも思うことでしょうが、御茶ノ水校舎の五階にあった小さなコの字型道場が大変印象的です。変形の小さな道場から幾多の名人、達人を輩出し、長年にわたって学生柔道だけでなく日本柔道のトップに君臨している背景には、先人達に通ってきた道や精神を脈々と受け継ぎ発展させてきたということがあるからに他ならないでしょうが、私には狭いながらも他にはない独特の雰囲気を持つあの道場がその象徴のように思えてなりません。私は現役選手時代、上村春樹先生が明大監督の頃に頻繁に明大道場へ出稽古させて頂きました。

明大の底力の原点は何なのか、それを吸収し自身自身を強化したいの思いついから出掛けたのですが、道場に一歩足を踏み入れれば明大関係者であろうとなかろうと柔道の一修行者として受け入れる雰囲気があり、随分と厳しくも良い稽古をさせて貰いました。常に激しい活気があり緊張感漂う稽古が今も強く印象に残っています。また、稽古の後には同期の重松裕之君（後に明大監督）や東海大学OBの滝吉君（当時は新日鉄本社）らとともに楽しく飲

み歩いたことも良き思い出です。都心に位置する地の利だけでなく、明大の道場には他校の選手であっても自然に受け入れる独特な空気が存在していたと感じるのは私だけではないでしょう。

また、私が母校国士館大学の監督であった時にも明大柔道部は大きな存在でした。幾度も熾烈な戦いを繰り返してきたと言えるでしょうが、明治との対戦ではたとえリードした状況であっても、また勝てる確信して試合に臨んでも、他にはない緊迫感と緊張感があり、常に気が抜けませんでした。勝負においては最後まで気を抜いてはいけませんが、鉄則ですが、対明大戦ではこれ以上ない特別な集中力を必要としました。

特に平成十年、十三年に全日本学生優勝大会決勝戦で明治に敗れ優勝を逃したことは忘れられません。その時の悔しさをバネとして国士館の再生を深く心に誓ったことが、その後の国士館柔道部と私の大きな財産となったのです。

現役時代には選手として力を付けさせて頂き、指導者となってからは戦いに臨む姿勢を学ばせて頂いたと強く感じております。

現在は、全日本男子監督という立場にありますが、全日本強化選手には多くの明大学生やOBがおります。彼らに共通していることは、古い伝統を継承しながらも常に自己を磨いていこうとする意欲を持っていることです。平成十五年の世界選手権では棟田君が金メダルを獲得し、アテネ・オリンピックでは唯一の学生代表として泉君が素晴らしい試合を展開して銀メダルとなりました。両君に象徴されるように、明治の選手は、前へ前へと向かっていく精神、何が何でも勝つんだという強い意欲が全身から溢れています。

百周年という節目を迎えられ、また新たな一歩が踏み出されることと存じます。日本柔道そして世界柔道の発展のためにも、明大柔道部の大いなる精神が脈々と続くことを祈念いたします。

## 明大の指導で防大柔道の基礎固め

木家 勝

(防衛大学校一九六二年卒)

昭和三十四年の三月、短い春休みがあつてほとんどの学生は故郷に帰りませんが、防衛大学柔道部員は合宿ということで、そのまま学校に残りました。「今年の合宿は明治との合同合宿だ」と田中部長から言われ、我々はびつくりしたものでした。

当時世界選手権の保持者であつた曾根さん、三十四年に卒業したばかりの神永さんが参加され、篠原主将率いる約三十名の明治大学柔道部員が、防大のある横須賀の小原台にやって来ました。

明治の指導陣では姿先生、久米先生、それから何人かの卒業生の方も参加されました。

防大の方は、一応全員参加ということで、五十名位だったでしょうか。そしてその他に地元横須賀から、渡辺利一郎先生(海軍柔道の大家)そしてその弟子の猪熊功さんが参加されました。記録によれば、この年の秋、日本選手権で神永さんと猪熊さんが対決し、神永さんが勝っているのです。今思いますと、まことに凄いメンバーが揃つたものです。

合宿前部長から訓示がありました。

「昨年防大は、はじめて関東学生を制して優勝することができた。しかし二年目は大変難しい。ここで再び勝つか、負けるかは、防大柔道の将来に大きな影響がある。

よって私は天下の明治をお願いして合同合宿をやってもらふことにした。君等の実力は相撲で言えば、明治の学生とは、三役と十両位差がある。しかし

しそれでもやらねばならぬ。稽古でいくら投げられてもかまわない。ただし、心の中でもう負けたと思つたら終わりだ。何か一つでもいいから、明治の部員に負けたくないでやれるというものを見つける為に、死物狂いで稽古せよ」と大変厳しいお話でした。

田中部長は、江戸っ子で、ふだんは大変洒脱な方でしたが、稽古には厳しく、カミナリ親父のような方で、この合宿実現の為大変尽力されたようです。稽古の内容は忘れてしまいましたが、準備運動から始まる稽古の流れは、明治流でした。乱取りに入りますと、なにせ実力に変な差がありますので、防大の選手要員以外の者は、別のグループにして稽古したと思います。稽古の見物は、神永さんと猪熊さん、この二人の方に明治のレギュラー要員と思われる部員達が次々と挑戦してゆくさまは、壮観でした。

特に猪熊さんの稽古の激しさと、これに立ち向かう明治の部員達の真剣な稽古ぶりは、今も脳裏に甦ります。

当時のことをある卒業生に聞いて見ました。

「何が一番印象に残つたか」

「明治の四年生が率先して道場に出て来て、陣頭に立つて稽古していたことです。だから、はつ刺たる気風が漲つていたと思います」

私もそう感じました。そういう雰囲気の中で、十日間稽古できたことは、防大柔道部にとってかけがえない体験でした。

その成果によって、昭和三十四年秋、防大は、二度目の関東学生優勝大会を制しました。当時の参加校は、防大を含め十四校で、麻布獣医、茨城、宇都宮、神奈川、関東学院、群馬、埼玉、順天堂、千葉、千葉工、山梨、横浜国立、横浜市立の各大学でした。

強敵は埼玉大学で、選手にはズラリと三段を揃えて、初段、二段の混じる防大よりは格上でした。

この合宿において私はまだ新二年生でしたから、あまり多くのことを憶え

ではおりませんが、一つだけあります。

午前の稽古に先立って、駆け足をトレーニングとしてやったと思います。小原台は小高い丘ですので、下の馬堀海岸まで降りて行き、そこから道場まで約1kmを走り込むというのは、なかなかハードなトレーニングでした。

特に明治の部員にとっては、大変だったろうと思います。

防大生は日頃の訓練で時々やっていることであり、又軽量でもあったので、ほとんどの者が楽に駆け上っていました。これが唯一、防大生が明大生に負けないトレーニングでした。只この時、猪熊さん(当時八五kg位だった)は、防大生に劣らず、猛然と先頭を走っていたことを思い出します。

また明治の主将篠原さんも、筋肉質の体格でしたから、先頭グループにいたように思います。実は篠原さんは、愛媛の三島高校の頃県の大会で活躍されていまして、私はその勇姿を見ておりました。

今でも、電光一閃ともいべき足払い、忘れられません。

それから二年、昭和三十六年春、防大は再び明治大学との合同合宿を行うことになるのですが、これも又田中部長の尽力によるものでありました。

今度は、明治大学は田中主将率る部員四十名位であったでしょう。

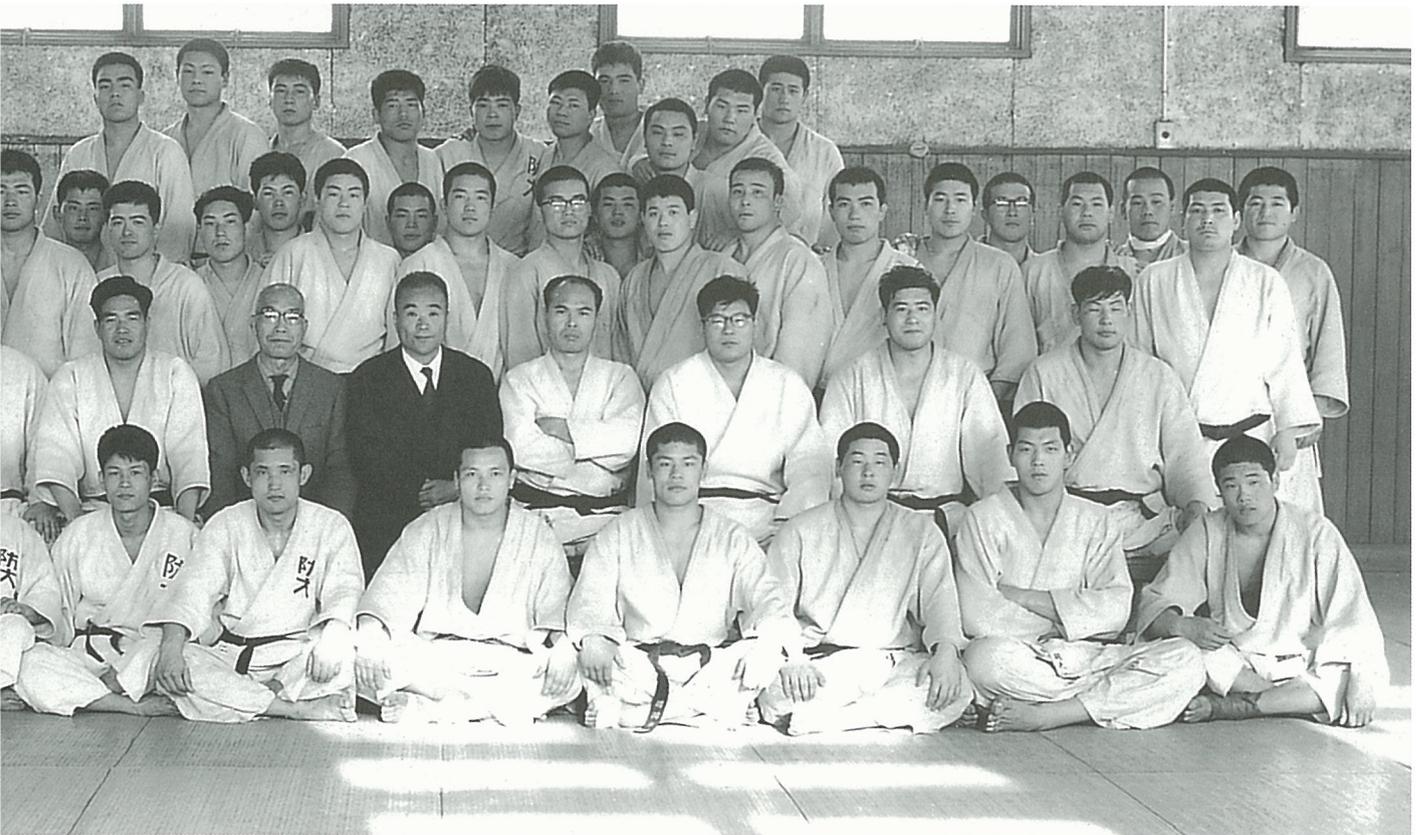
当時私は新四年生で、マネージャーを兼ねておりましたので、明治のマネージャーの松本順吉さんと事前の打ち合わせをして、合宿に臨みました。

合宿の内容は、一回目と大きく変わったところはなかったと思います。明治の卒業生では、神永さんそして重松さんも参加されたと思います。

明治の稽古ぶりは二年前の合宿の時と変わらず、厳しくしかし明るい雰囲気の中で行なわれたように思います。

主将の田中さんは、高校時代から有名な人でしたので、四国出身の私でもその名を知っていました。堂々たる体格で、小気味の良い払い巻込みを得意にしていたと思います。

この年明治には、ユニークな新入生が入っていて、大変印象的な柔道をや



っていましたので、今でも鮮明に憶えています。

坂口さん、関さんです。対照的な体格で、柔道も全く違うタイプでしたから、忘れられません。

特に坂口さんには、一度乱取りで当たりましたが、その背丈と足の大きさに驚いたというのが、偽らざる印象です。

しかし後にプロレス界で活躍される姿を見て、その逞しい姿に又驚きました。

この合宿は、実は一回目に劣らず重要な意味がありました。私を含め防大の新四年生は、メンバーが手薄で、関東の四連覇を危ぶむ声があったのです。

今度は私自身、責任がありますので、必死の思いでした。したがって、稽古の中身については、ほとんど思い出せません。

合宿の成果は、秋の関東大会での四連覇をもたらしてくれ、これが尔後の八連覇に繋がっていったと思います。

合宿で得たものは、いろいろありますが、最も肝心なことは、一流の柔道に触れることができたということでしょう。

今ひとつは、柔道への取り組み方ではなかったかと思えます。技量的には格段の差がある明治の柔道部員と共に稽古をして、にわかになくなるはずはありません。しかし、稽古への真剣な取り組みは学ぶことができました。

そしてそれが自信につながっていったと思えます。そういう意味で、防大柔道部の基礎を固めるために明治大学柔道部の果たした役割は、大きいものがあつたと考えます。



昭和36年3月、防衛大と明大柔道部の合宿

## 懐かしき人びと 明柔と拓大

宮澤正幸

(拓大一九五三年卒)

ちょうど六十年前の終戦の昭和二十(一九四五)年八月十五日。私は、満十五歳六カ月の旧制中等学校四年生だった。以後、占領軍は学校武道を七年間も禁止にした。柔道をやりたい人はレスリングに転向した。明大は文部当局の目をくぐって第二レスリング部の看板を掲げ、そこで柔道の練習をした。ただし、町道場・警察柔道は許されていた。昭和二十二年五月、水道橋の旧講道館で憲法発布記念柔道大会が実施された。当時は段別だった。初段の一回戦で曾根康治(埼玉)が石井庄八(千葉)を破り、曾根が優勝、即日二段に。三段の部は市原要(千葉)が神田和夫(埼玉、のち明大監督)に勝った。四段は伊藤信夫(東京)である。中大の石井は昭和二十七年ヘルシンキ・オリンピックのレスリングで自由形五七kg級に優勝。翌年二月、レスリングのトルコ遠征に明大の曾根と伊藤が参加している。

そのころ拓大の学生だった私もレスリング部に勧誘されている。社会人になった昭和二十八年以降、明大柔道部の先生方にとっても優しく親切にしていた。東京学柔連会長も務めた八島輝徳先生と、狩野敏先輩(拓大理事長)が大塚の居酒屋で一杯やった。八島さんは「狩野さんは偉い人です」と繰り返した。大川周明の弟子として有名だった。

そう言えば明大には、昭和七年五・一五事件で、犬養首相を襲撃した「問答無用、撃てッ」の山岸海軍中尉の弟・山岸伍郎さん(新潟・高田中学―専門部)もいたはずだ。

小田明道、葉山三郎、姿節雄、久米勝、齋藤雅夫各先生のお顔も声もまだ

忘れはしない。

昭和三十九年、東京オリンピックが近くなると、強化担当の葉山さんに呼ばれた。「済まんが、木村政彦君(拓大出身)の力を借りたい。お願いしてくれませんか」というお話だった。草間弘栄拓大監督も同意し、木村さん引っ張り出し工作は実現した。

その二年前、ジャカルタでアジア大会が開かれた。私は特派員で派遣されるので、日イ親善用に日比谷の旭化成(三信ビル)を訪ねた。珍しいスポーツ切手カレンダーを分けていただくためだ。広報の人が言った。「うちにも柔道の岩崎勇がいますから」。澤山くれた。

現地の親善柔道大会には高田誠之助四段が日本代表で出場した。まだ、アジア大会に柔道は採用されていなかった。岩崎、高田氏とも明大である。

そう言えば、明大合宿所を訪ねて書いた人は、石橋毅次郎五段とか山尾五段、浅野四段とか。河辺一彦氏は後年、全日本選手権大会で護身術の取りを演じた。ホールドアップの体勢から相手のピストルを奪い、背中に突き付ける。その変幻の技とスピードは、お見事でした。豪傑だった曾根氏は五十二歳の若さで逝った。

神永昭夫氏と私の本家・分家は仙台市の隣近所。『全日本実業柔道連盟の記録』を刊行するまで、そのプライバシーは沈黙した。昭夫さんの実弟、正夫さんは情の細かい人で私を義兄弟扱いにしてくれる。書きたいことは山ほどあるが、もはや制限字数。涙をのんでペンを止める。